人間生活が主体の“協治”を説く

後藤新平の都市思想

青山 俿（やすし）

国立国会図書館蔵
後藤は内務大臣として、関東大震災からの復興を担う。

昭和初期の昭和通り、江戸橋付近から京橋木挽町を望む。
出典：『大東京写真帖』1930

関東大震災直後。陸軍が火災発生で床が焼けた吾妻橋に応急処置を施す。
出典：東京市「THE RECONSTRUCTION OF TOKYO」

人々に寄りそう都市計画

後藤新平の都市思想は、人間中心である。都市は人間が集まって暮らすところだから「都市計画は民衆を離れてはならない」と主張する。

東京市長時代につくった「東京市政要綱」は、道路、ごみ処理、社会事業施設、教育、上下水、住宅、電気・ガス、港湾、河川、公園、葬祭場、市場、公会堂など人間生活に関わる事項をていねいに取り上げた堅実な計画だ。この計画はその後、日本の自治体がつくる長期計画のモデルとなった。

大正12（1923）年、関東大震災が発生し、後藤は震災復興を担う内務大臣として閣議に「帝都復興の議」を提案した。「東京の復興は単に一都市の問題ではなく、日本の発展、国民生活の根本問題だ」と言って、復興計画を作成した。

近代的な生活を目指した不燃建築の同潤会アパート建設に加え、日本初の海辺公園と言うべき横浜の山下公園、日本初の川辺公園となった東京の隅田公園などたくさんの公園、そして市民が集い議論するための日比谷公会堂など、人間生活中心の各種都市施設が震災復興でつくられた。

今日、わが国では都市計画という四字熟語を使うより、「まちづくり」という平仮名語を使うことが多くなった。ヨーロッパでも土地利用計画と言わずに「空間計画」（Spatial Planning）という場合が多くなった。アメリカでも成長管理政策と言っていたものを今では「総合計画」（Comprehensive Planning）と呼ぶ。いずれも、都市を論ずるとき、そこで生活を営む人間を中心として、福祉、教育、経済、環境など、幅広くとらえようと考える。後藤はそれを1世紀前に考えていた。

効率性と快適性

後藤の都市思想は、効率性と快適性のバランスを重視する。

震災復興により昭和通り、日比谷通り、晴海通りなど主要な幹線道路が整備された。日本橋魚市場は築地に移転した。隅田川に吾妻橋、駒形橋、言問橋、厩橋など隅田川を橋の博物館とした鉄製の名橋が架けられた。後藤は社会が工業化時代から情報化時代に進化すると人と物の移動が活発化することを見抜いていて「自動車の数が震災後において倍数以上になる」と断言している。放射道路に環状道路を組み合わせる、欧米にはなかった環状道路構造を計画した。私たちが環2、環7などと呼ぶ8本の環状道路計画は震災復興で決められたのである。

快適性という面では同潤会アパート、隅田公園、錦糸公園、浜町公園、横浜の山下公園をはじめ各種公園も整備された。橋に付属した橋詰広場、学校付設公園、中央分離帯にみどりを配した昭和通り（戦後、車道にしてしまった）などがあった。市民が政治を議論する場として日比谷公会堂をつくった。20世紀の都市論を貫く原理は効率性だったが21世紀の都市論を貫く原理は快適性だ。後藤の都市論では当時から二つの原理がよくバランスしていた。

「自治の精神」が第一

後藤の都市論は地域の発展に重点を置いていた。東京市長時代、「自治は市民一人一人が市長である」「自治は市民の中にあってよそにはない」と言っている。どこかから権限や財源を分けてもらうのではなく、地域からの政策発信こそ地域自治であるという考え方である。「都市の計画は健全なる自治の精神を離れてはいけない」と語る。都市は本来的に自由と自治を求める。そこでは市民一人一人の義務と責任を伴う。後藤は「都市計画の上に自由営業を許し」、「鉄道、上下水、電気・ガス、市場、港湾」などの「都市経営公営」を説き、「自治の精神を離れた都市計画は無用」と断じている。

現代の都市ガバナンス論は上から下を「統治」（ガバナント）することを否定し権力と市民が対等の関係で協働する「協治」（ガバナンス）を説く。後藤は都市ガバナンス論の先駆だった。

後藤は都市をマクロでとらえるだけではなく地域でとらえ、個人でとらえていた。工業化時代の大量生産社会に比べて高度情報社会では、創造的能力が求められる。後藤は「科学と情報で生き残れ」と書き残している。

後藤は都市計画の実現性を重視した。内外を問わず、理想の都市計画はたくさんある。しかし実現した都市計画は少ない。後藤の都市計画は全部ではないが実現したからこそ歴史に残った。

都市計画の基礎をつくる

震災復興計画は当初の計画に比べると大幅に縮小された。各地の地権者が区画整理に反対したからである。復興事業の予算も十分の一にまで削られた。「後藤、破れたり」と言われたが、後藤は自分の面子より復興を優先し不人気を承知で大規模な区画整理を断行した。結果として、震災による焼失面積に近い規模での区画整理を実施し、今日の東京の都市計画の基礎をつくった。

都市計画は、白紙に絵を描くのではなく、現に人が住み、働くまちを、生活や産業を維持しながら改造していく宿命をもっている。後藤は、そういう都市の現実を踏まえて都市計画を立案した。後藤がつくった道路や橋、公園、公会堂を私たちは今でも使っている。これに対して私たちの世代は、どれだけのものを次の世代に残しただろうかと反省せざるをえない。

都立中央図書館蔵
1930年代の絵はがき「大東京東洋一の楽天隅田公園の春」より。

のちに日比谷公会堂となる東京市公会堂（写真中央）
出典：『大東京写真帖』1930

青山 俿
〔あおやま・やすし〕
明治大学名誉教授

1967年都庁職員。都市計画局課長、企画審議室計画部長等を経て1999年～2003年東京都副知事。2004～2018年明治大学公共政策大学院教授。博士（政治学）。現在一般社団法人都市調査会代表。主著：『世界の街角から東京を考える』（藤原書店）、『小説後藤新平』（学陽書房）、『都市のガバナンス』（三省堂）など。